

## (災害に関するボランティア活動)

22011272 浜崎 峻 [22011272sh@tama.ac.jp](mailto:22011272sh@tama.ac.jp)

22011289 藤森 龍 [22011289rf@tama.ac.jp](mailto:22011289rf@tama.ac.jp)

### 研究背景

我々自身がボランティアというものの概念や実際の活動率などを知らなかった。

### 研究目的

社会生活基本調査の資料を読み、知識不足と本来の意味を知ったことでボランティアに対しての考えに変化が生まれたためこの調査を行いより多くの人にボランティア活動の実態を知ってもらおうと同時に近年来ると言われている大きな地震に備えるもしくは意識を持ってほしい。

### 研究手法

e-Stat から災害に関するボランティア活動を、5年ごとの3回分のデータを収集した。また、3回分のデータ内である2006年から2016年に日本で起きた大きな地震である、熊本地震、東日本大震災、新潟地震を選択した。そこから、e-Statで得たデータと、地震を照らし合わせ、エクセルでグラフを作成し、地震が起こる前と後で、ボランティアの活動がどう変わるか調査した。

### 結果

災害にあった地域の場合、災害に関するボランティア活動の割合は急激に増加したが5年程たった場合徐々に平均の参加率に戻る事が分かった。

つまり、災害が起きてからその地域の住民にとって効果のある期間は5年以内と言える。

### 考察

ボランティアの起源である他人のために何かしたいという自己意識から生まれる行動が減るということは、他人への関心が低くなりあまり他人のために行動しようという意識がなくなりつつあるといえるのではないかと感じる。

災害に関する活動がなぜ上昇したのか、それは災害などがメディアを通して多くの人物の目に入ることが多い。そのため、ボランティア活動の行動率が上昇したのではないかと推測する。